定本 山頭火全集

第七巻

春陽堂版

定本　山頭火全集　第七巻

昭和四十八年六月二十五日　第一刷発行

著作者　種田山頭火

発行者　和田欣之介

東京都中央区日本橋三ノ四ノ二六

発行所　株式会社　春陽堂書店

印刷　三協美術印刷株式会社

製本　大口製本印刷株式会社

0395-200107-3066

目次

書簡編

飯尾星城子宛……三
飯野惣太郎宛……四
泉　薫園宛……五
板倉篤一郎宛……六
伊東敬治宛……六
荻原井泉水宛……八
大橋蓮子宛……二四
大前誠二宛……二四
大村章郎宛……二七
大山澄太宛……三一
小城満睦宛……三六
風間北光宛……三七
亀井岔水宛……四三
河村義介宛……四四

木村無相宛……四九
木村緑平宛……五一
久保白船宛……一九三
河内山光雄宛……二〇五
小島広哉宛……二〇七
小林銀汀宛……二〇八
小林文夫宛……二〇九
後藤貞夫宛……二一〇
斎藤清衛宛……二一四
白石　基宛……二二八
杉田作郎宛……二三一
巣山鳴雨宛……二三二
関口江畔父草宛……二三四
滝口多々桜宛……二四六
田代英叟宛……二四八
高橋一洵宛……二六九
高橋良太郎宛……二七一
近木黎々火宛……二七三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

中村苦味生宛……三一一
原　農平宛……三一七
藤田文友宛……三一九
前田若水宛……三二一
森富織太宛……三二二
水田清恵宛……三二二
松金指月堂宛……三二三
前田夕暮宛……三二五
松垣昧々宛……三二五
三宅酒壺洞宛……三四〇
村瀬千枝子宛……三四三
山部木郎宛……三四五
山本国蔵宛……三五四
米田雄郎宛……三五六
和田　健宛……三六五
渡辺さとる宛……三六六
岡田迂生宛……三七五

（追加）

日記補遺……三七七
年譜……三八五
解説（大山澄太）……四四一

書簡

〔ア行の部〕

【飯尾星城子宛】八幡市荒生田公園内

1 **昭和八年十二月二十三日** 山口県小郡町より

庵には節季も正月もありませんが、あんたを待つてをりますよ、句集はまだ出来上つてまゐりません、入手しだい送ります、あしからず。
お申越にまかせ写真二葉送りました、あまりほめないやうに、おだてないやうに、おてやわらかにねがひますよ、その新聞見せていただきたし、光の会の方々によろしく。
奥様によろしくお伝へ下さい。

2 **昭和九年三月十日** 山口県小郡町より〔星城子・白雲子・鏡子連名宛〕

よせがきありがたうございました、私はいよ〳〵廿二三日頃から東上いたします。
広島から神戸までは船、それからぼつ〳〵歩きます、なるたけ句集を買つてもらつて無理をしないやうにします、手足少々不自由、おかげで自然的節酒ができます。

3 **昭和九年九月七日** 山口県小郡町より〔封書〕

すつかり秋となりました。
皆さまおかはりないでせう、私はどうにもかうにもやりきれない気持です、いら〳〵して、そのくせ、めそめそして、何をしても変質的になります。
借金はサナダムシのやうなものですね、春から夏へかけての不始末は、緑平老が当面だけは糊塗してくれましたが、その残滓が苦しめます。
身から出た錆をあなた方に落して下さいとはいへた義理ではありませんが、何とかなりますまいか、かう

なれば奉賀帳でも何でも構ひません(いくらでも)。
句だけは作つてをります、今生の最後のものとして
私自身をしつかりとはつきりうたひます。
こんな手紙、失礼といふよりも恥晒しですね、老来
ますます惑ふこと多し。――

九月七日朝　　種田山頭火

星兄侍史

【飯野惣太郎宛】　小倉市放送局下

4　**昭和八年六月五日**　戸畑にて

昨夜は長府の黎々火居、今日は御地を素通りして戸畑の入雲洞居のお世話になりました、明日は八幡へ、それから糸田へ、そして行橋をまはつて御地へ向ひます、いづれお妨げしなければなりません、十一日十二日夕方御都合よろしうございましたら御在宅をお願ひいたします。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

実證されるとの御意見には興味を引ました、寸楮切ましたので、いずれ亦、草々

【泉　薫園宛】

東京市下谷区北稲荷町三七
小島方

5　**年月日不明**　山口県小郡町より

拝復、御尋の件、難しい問題です、確に俳句が十七字を墨守する以上、律と、文語は、表裏一体のものですし、その枠内で読者に訴へんとするには、季語や、切字の援用、つまりあらゆるものを利用せねばなるまい、との御意見には、当然とも想はれます、然し、俳句と短詩との距離、何故吾々自由律派が俳句と言う名称にこだわるのか、短詩、もしくは俳句風短詩で結構ではないか、さうでないのは、俳句の持つ伝統と名声におんぶしようとする卑怯未練のやり方なりと言ふのには、承服出来ません、亦、正岡子規は実相観入、など思も及ばぬ、唯、平面描写のみに汲々とした、三等ヤクザ俳人であり、それは彼の「赤々と日はつれなくも秋の風」に対する論評で

【板倉篤一郎宛】千葉県大網町

6　**昭和十年六月二十九日**　山口県小郡町より

私こそ御無沙汰、よく降りますね、庵中独坐、時々街へ出かけてあばれます。

空へ若竹のなやみなし

筍がによき〳〵、庵主ぴん〳〵してをります。

御地方の女学校へ赴任の筈だつたGさんは都合によつて中止いたしました。

今春はだめでしたが、どうでもかうでも、来春はお目にかゝれませう、東上いたしますつもり。

【伊東　敬治宛】山口県小郡町西ノ端

7　**大正七年七月十七日**　熊本市下通町より〔絵はがき〕

御手紙なつかしく拝見いたしました、おかはりなくて何よりです、私の帰郷は八月の中頃といふ予定でありますが、予定の行動をとりえない私の事ですからそのおつもりで、とにかくお訪ねする時には十日位前に御知らせ致します、是非お目にかゝりたいと思ひます。

工藤さんの近況御存じではありませんか。

8　**大正十一年十月九日**　熊本市下通町より〔兵庫県宍粟郡土万村宛〕

伊東さん、急に思ひ立つて四年振に帰つて来ました、そして長い間の不自然な生活から来る『つかれ』をしみ〴〵感じました、――最後の一線は最初の一線

です、私は更に、また、足場を組み直さなければなりません。
あなたの御新婚を心から喜びます、そしてあなたの生活がますく幸福であるやうに切に祈つてゐます。
私は今月中にまた上京します、東京の生活を整理するために。——

雨がふつたりします、お目にかゝりたくてなりません、今月は早く三八九を発行して、福岡あたりまで歩きますつもり、だいぶ垢がたまりましたから。
もう花も散つてしまひましたね。

9　**大正十三年六月二十八日**　熊本市下通町より

御転勤後の御動静を承はりたいと思います、長府の方へ手紙を出して置きましたが届きましたか。
私は春から引続いて店の方にをります。
此夏は法要のためにちよいと帰郷します。
すみませんが此のハガキは御廻送を願います。

10　**昭和六年四月九日**　熊本より〔山口県美禰郡大田町宛〕

御手紙ありがたく落手いたしました、世の中はうるさいものですよ、私のやうな生活にも風がふいたり

【荻原井泉水宛】

神奈川県鎌倉町材木座光明寺大聖閣

11 「層雲」大正三年五月号

俳壇が根本的に動きつゝあることを喜びます、或る物を摑みつゝあることを更に喜びます、そしてその基調である主観的傾向が漸次その当然且つ必然の結果として象徴的色彩を帯びつゝあることを感ぜずにはゐられません、若し幸にして私の知識と時間とが許しますならば幼稚な感想を書いて高教を仰ぎたいと思つてゐます。

近来、句に深さのないのが不平でなりません、自己及び自己の周囲に対して殊にかういふ感に打たれます、純文芸として短歌ほどの分野を占めるには俳句は新らしい第一歩を踏み出したに過ぎないと思ひます、切に御健康を祈ます。

12 「層雲」大正四年四月号

御無沙汰致しました、其後お変りもない事と存じます、今年は余寒が厳しうございましたが、昨今どうやら本物の春がやつて来たようです、野の鳥が麗かな陽を浴びつゝ春の歌を囀つて居ります、私も小鳥のやうに、また小鳥の如く「生の歓び」を歌ひたいと思ひます。

新俳壇も既に言説の世界から実現の世界へ入りました、右すべきものは右し、左すべきものは左しつゝあります、イんだまゝで右することも左することも出来ないものも居ります、すべて新しい運動は最初或る個人の自覚から起り、それが個々の人の自覚となつて初めて意義があり価値があると信じます、俳壇の個人主義！　そこから個性ある作品が生れます、そして個性ある作品でなければ力も光もありません。

我等が進みつゝある道は進めば進むほど険しく且つ狭くなります、而しそんな事は我等にとつては何でもありません、全力をぶちこんだ仕事に難易はあり

ません、確信した道に広狭は有ません、全我的に進みつゝある人は荊棘の中に道を拓いて進みます。

私は此頃あまり句が作れなくなりました、句が作れないといふ事は私にとつては寧ろ喜ぶべき事実であります、私は漸く句を作る時代を通過して句を生む時代に踏みこんだのであります、私は上手に作られた句よりも下手に生れた句を望みます、たとへ句は拙くても自己の生命さへ籠つて居れば、それだけで存在するに足ると信じて居ります、而しさういふ句はなか〳〵出来ません。

私は昨日まで自分は真面目であると信じて居りました、其信念が今日すつかり崩れてしまひました、私はまた根本から築かねばなりません、積んでは崩し、崩しては積むのが私の運命かも知れません、が、兎に角、私はまた積まねばなりません、根こそぎ倒れた塔の破片をぢつと見てゐる事は私には出来ません、私は賽の河原の小児のやうに赤鬼青鬼に責められてゐます、赤鬼青鬼は私の腹の底で地団太を踏んで居るのです、実人生は真面目でありたいとか、真面目でなければならないとかいふ事を許さないほど余裕のないものであります、真面目な人は真面目になるもならぬもない、真面目な生活しか生きえないではありませんか、いつもの癖でまた書かでもの事を書きました、お大切に願ひます。（三月十七日夜）

13 **「層雲」大正四年八月号** 大道にて

梅雨が霽れました、澄み切つた空を仰ぐと身も心ものび〳〵として歌ひたくなります、私の新緑病もすつかり快くなりました、落ちついた、しつかりした歩調で進みたいと思ひます。

現代通報が非常によくなつて嬉しくてなりません、社会版の方は物足らないところがありますが、文芸版の方は殆んど申分ありません、売行もよからうと思ひます。

国字問題に就いての諸家の意見を面白く読んでをります、ローマ字で書いて、それが直ぐ頭へ響くやうな句がどし〳〵生れなければなりません。

私のやうなものでも国字問題、国語問題に就いては大変悩まされてをります、私一個の、当面の問題と

しては――殊に句作の場合に――国語の貧弱を痛切に感じます、国字の不便は申すまでもありません。漢語（主として成語）をなるたけ使はないやうにする事がペンに親しみのある人の責任であると思ひます、そして日本固有の言葉を豊富にしなければなりません、或る感覚によつて惹き起された気分を現はす言葉などは非常に少ないやうに思はれます。埒もない、生意気な事を申し上げました、お大切に願ひます。（七・七）

14 **「層雲」大正四年十二月号** 大道にて

□御大典が迫りましたので世の中が色めいてきました、私は忙しさに何も彼も忘れてしまひました、脚気が日にまし悪くなりまして此頃ではもう手足が動かなくなりました、その動かない手足を動かさなければならない境遇を却つて尊いやうにも思ひます。今月の層雲は近来になく佳作が多いのを喜びました、鳳車兄武二兄の作はいふまでもなく、紫洋兄らの作に独自の光があるのを非常に嬉しく思ひました。

15 **「層雲」大正五年七月号**

転居後四旬、私の心はまだ落ちつきません、此度は何も書かないでたゞ拝見して置きます、私は切に此企がまことの求心結果として常に若く強くあるやうに祈ります。

16 **「層雲」大正六年五月号** 熊本より

□我らの俳句は一転後、漸次本質的になりつゝあることを強く感じます、今までの道程とても固より真摯でありましたけれど、我ら自身感じてゐたやうに、ともすれば外部的でありました、事象の本質にまで浸潤することに努めてゐながらも、兎角、皮相にとゞまつてゐる憾みがありました、それが昨年の後半期から、少しづゝ内部に喰ひ入るやうになりました、そして此頃では、内部生命に触れた作を見出し得るやうになりました、一々の作品についていはないでも、層雲の愛読者は――その人が真面目であるならば――かく感ぜざるをえない事実であります。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com